

國學院大學学術情報リポジトリ

和歌教育に見る短歌結社の一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益井, 邦夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001710

和歌教育に見る短歌結社の一考察

益井邦夫

はじめに

皇典講究所の発足以来、國學院大學に於ける和歌教育研究も百三十年の歴史を閲して来た。その成果は時を経るに従って徐々に裾野を広げ、「國學院雜誌」(明治二十七年十一月創刊)や「國學院大學新聞」(昭和二年六月一日創刊)などから、在職する教職員をはじめ生徒・学生、卒業生、ひいては学外の方々から寄せられた数多の歌を読む事が出来る。歌の魅力に惹かれた生徒や学生の中からは社会に出ても作歌に勤しみ、時には秀歌を集めて出版したり、また結社を主宰する諸兄も現れ、その成果は数え切れない程である。

因みに、皇典講究所初代総裁有栖川宮^{たかひと}幟仁親王(同宮家第八代)の系譜は書道(有栖川流)と和歌を家学として継承された宮家で、幟仁親王の和歌は九歳の頃、父^{つなひと}韶仁親王(第七代)から学んで家道を継ぎ、蘊奥を極めてからは、明治天

皇に書道と共に歌道も師範された。

そうした家道の継承者である熾仁親王を総裁に戴いた皇典講究所・國學院大學は、国史・国文・国法を標榜する学府として創立されたが、その基盤に和歌教育研究を置いたのも、うべなるかなである。

一、短歌詠草の会を結う

学内の動静に限らず、なぜ日本人は千三百年の長きに亘って、三十一文字の世界に拘りを持ち続けて来たのであるか。その在り様を探るべく研究に努める折口信夫教授(十八期大文、釈迢空)は大正期に入り、短歌結社「白鳥」を起こし、大正十一年一月に雑誌「白鳥」を創刊し、また同年に高等師範部の生徒を主体に「くゞひ(鵠)」と「高日」の両社を結び、大正十四年に雑誌「くゞひ」を創刊した。「高日」の活動は定かではないが、同年一月に予科生徒を対象にした「鳥船」をも起こし、大正十五年四月には雑誌「とりふね」を創刊して自らを鼓舞し、また社員・同人生徒の詠草指導に一層努めた。

また教職員有志も盛んに作歌に励んで来たが、大正七年十一月三日に、本居宣長を慕って「白菊会」を組織し、その日に鈴屋翁の影前で歌会を催した。出席者は石川岩吉(三期、皇子傳育官)・井出豊作(四期、実践女学校教授)・植木直一郎(六期、皇典講究所・國學院大學教授)・金子元臣(國學院大學講師)・桑原芳樹(水穂会、皇典講究所幹事長)・斎藤惇(二期、皇典講究所・学習院女学部教授)・武島羽衣(又次郎、國學院大學教授)・三矢重松(一期、明治二十六年卒業、國學院大學・東京高等師範学校教授)・宮西惟助(一期、根津神社社司、内務省、國學院大學教授)・本居五鈴(清造、四期、帝室臨時編修局、皇典講究所・國學院大學講師)の十氏であった。

その折の詠草は、かねて出題の兼題「秋山」に因むものであった。

▽石川岩吉 兼題 みやまぢの秋のよそひにあくがれて思はぬ峰に日をくらしけり、当座 友 朝夕にむつびなれつ、相見れば庭の小草もわが友にして▽井出豊作 兼題 をりく／＼のながめはあれど嵐山秋こそ殊にあはれなりけり▽植木直一郎 兼題 麓路のもみぢかくして立つ霧のうへに思はぬ峰を見るかな、当座 橋 年々にひらけいく野のみやま路にかけわたしたるくろがねの橋▽金子元臣 兼題 笹わくるそでにつきたる草のたねこれや紅葉のほかの山つと、当座 市 燈火のかげにそむきてふくろもつをみなさびしきよるの米市▽桑原芳樹 兼題 秋は今央となりぬ山室の山や紅葉の盛なるらむ▽斎藤惇 兼題 かほにさへ紅葉ちらしつ秋の山瓢のさけをくみかはしつ、当座 水 嵐山花も紅葉もめでたきは下ゆく水のあればなりけり▽武島羽衣 兼題 てりはゆる山のもみぢのあかきいろを仰ぎても見むおのが心に、当座 書 ものまなび浅くなりけりなかく／＼に書よむたよりよくなれる世は▽三矢重松 兼題 秋山のあはれをみよとしをりせしあとをたどればあはれ秋山、当座 心 にほひなき庭のを菊を手折りきて捧げまつるもおのが心と▽宮西惟助 兼題 峠みちこゆればまたも山見えて霧のそなり紅葉ばの里、当座 竹 すく／＼と聳えし節のいつこよえいたわみて竹のふりはつくれる▽本居五鈴(清造) 兼題 山は秋あきは山住み水の音も風のひゞきもさやけかりけり、当座 綱 大神の国こ／＼とひかしけむ綱の八十綱今もゆるはず▽山本信哉 兼題 おくつきのしるしの桜秋ふけてもみぢしぬらむ山室の山、当座 苔 古寺のこけのむしろはやれはて、みをくちなはのぬふかひもなし

因みに本居清造は松阪本居家五代目の当主で、本居豊頼(國學院講師)から学統を継承した。

「白菊会」の第一回歌会は翌十二月一日午前十一時から麴町区飯田町(現在の千代田区飯田橋)の國學院大學構内に有った院友倶楽部(院友会)に於いて開催した。当日の参会者は桑原芳樹・青戸波江(皇典講究所勤務)・三矢重松・羽

生永明（二期、青山学院教授）・岩崎春彦（櫻木神社社掌、皇典講究所・順天中学校講師）・米野一馬（二期）・斎藤惇・鳥野幸次（三期、学習院教授）・本居清造・井出豊作・堀江秀雄（五期、開成中学校教諭）・伊川讓（一三期、宮内省圖書寮勤務）・三崎幹一郎（二〇期、明治四十五年、商工中学校教諭）・大塚承一（二六期、國學院大學勤務）の十四氏であった。

第一回歌会の模様と会名の由来に就いて、斎藤惇が次の様に綴っている。

この夜うち集へるが中に、われら、日々学校に其の他に、読本を講じ文法を説き、或は編輯の事などに没頭して、歌よむ機会はいと稀なれば、詩想の泉もほと／＼渴れなむとするは、くちをしき事なり。

あはれ、今日のこのまとゐを縁として、一月に一たび同じ志の人々うち集ひて、歌よみかはさむは、なか／＼に俗事につかれたる頭脳を休むるよすがともなりなむ、いかにさは思はずやといふひとのありければ、人々それよからむとて、その第一回の会を、十二月一日午前十一時より院友倶楽部に開くこと、なしぬ。

いよく其の日となりければ、先輩なる桑原芳樹・青戸波江両氏をはじめ、三矢重松・羽生永明・岩崎春彦・米野一馬・鳥野幸次・本居清造・井出豊作・堀江秀雄・伊川讓・三崎幹一郎・大塚承一の十三氏及び、おのれを合せて十四人、兼題なる「霜」の歌を持ちて来会せり。

かくて一箱の弁当と一瓶の酒とを配りて談笑の間に昼食をすまし、やがて当座題「古城」と披露せられければ、さすがに、一しきりは、声をひそめ息をころして、各想を練り思を凝らすさまなりしが、相前後して読み出でたる、多きは二首三首にも及びたりけり。

かくて、青戸・本居二氏の披講ありて後、会名なきもいかゞあらむ、何とかやよき名はあらじかといへば、あまりに、事々しく唐めきたらむもおもしろからず、先帝の御誕辰なりし十一月三日の、菊のさかりなる頃に根ざしそ

めつるなれば、唯何となく白菊会と名づけむはいかにといふ人のあるまゝに、それよけむとて、会名も定まり、次の会は一月十一日、兼題は「炭」と定められたり。

かくて、茶をのみつゝ、くさぐさの物語をなし、或は短冊に歌かきなどして、日暮るゝ頃に、おのゝいとまを告げて別れさりぬ云々。^①

とあり、会名は十一月三日(明治節)、咲き誇る菊の花に因んで命名したとある。

第一回の兼題は「霜」、当座の題は「古城」であった。

▽桑原芳樹 兼題 月影のかたぶく見えて柴の戸もまがきも白くしものおくなり、当座 旅人も行手あらそふこれやこの千代ふる城と昔しのびて▽青戸波江 兼題 思ひしにたかはざりけり夜もすがらさえし軒ばのけさのはつ霜、

当座 南山の峰よりみねにきづきたる大城のあとに朝日たゞす、▽三矢重松 兼題 さくすゝの五十鈴の川の橋の上

に清々しくもおけるはつしも「十一月十一日の事なり」、当座 韓国の古城にたちて見さくればまづ思ほゆる伊企儼^{いきな}

大葉子^{おおばこ}▽羽生永明 兼題 かさゝぎの橋の上ゆくあら駒のいふきもしろく霜おきにけり、当座 夏草のしげれる城の

上風かろくたがゆめならむ蝶のとびかふ▽岩崎春彦 兼題 ①いつのまか黄菊の花もあせにけるおく霜ふかくなりま

さりけむ、②つらゝゐるほども近けむ今朝見れば庭しろ妙に初霜のおく、③おく霜の白きを見ても思ふかなかしらの

霜もおきやまさむと、当座 吹きすさぶあらしに木々の葉も散りて一きはしるし白鷺の城▽米野一馬 兼題 うちか

へす田の面を見れば少女子のうすけはひせる今朝の初霜、当座 いにしへを語る人だになく虫のこゑあはれなる城の

松蔭▽鳥野幸次 兼題 わだちのみ黒くのこりてあり明の月かげ寒し橋の上の霜、当座 おやゝの出入つかふと仰

ぎけむかすみが城の春ぞ恋しき▽本居清造 兼題 あたゝかきけふのひよりも見ゆるかな朝日かがやく霜の光に、当

座 ただひとつ残れる城のすみやぐら夕日うすれて秋の風吹く▽井出豊作 兼題 たゝまくもをしき別れの帰路にお

く霜しろし夜はふけぬらし、当座 おのがじし固めし城も尋ぬべき跡なきまでになれる御代かな▽堀江秀雄 兼題
 しら菊のしをる、霜に驚きてかたきこほりとさけびつ我は、当座 世々経ても青葉の城は益荒男の南はかりしいさを
 かたれり▽伊川讓 兼題 おきなくさ昔ゆかしききせ綿の色をふけてふれる霜かな、当座 墨染のゆふ日はおちて
 いにしへをかたる城跡あきの風吹く▽三崎幹一郎 兼題 木枯に吹きおくれし百千鳥羽かぜさやぎてしもの花散
 る、当座 まがつ神すむてふ淵に影うけてかどの矢倉のくえのこりたる▽大塚承一 兼題 おく霜にこゝろなき身も
 この朝は箒かた手にしばしたゝずむ、庭のおもに雪とまがひて見ゆるまで霜はおきけり風寒きあさ、当座 ますらを
 がこもりし城はくえはてゝ月かげさびし国府の高岡

その後、会員に池邊義象(國學院大學元講師)、石田吉三、泉田荒吉(二期教習科)、泉田新城、市河竹麿、稲村真
 里(二期、高良神社宮司)、岡山高蔭(國學院大學講師、書家・歌人)、折口信夫、加藤亀松(一期)、賀茂百樹(國學
 院大學講師)、笠原節二(一六期師国漢、皇典講究所員)、金田秋香(菊三郎、五期、東京府立第一高等女学校)、菊池
 武文(三期、諏訪神社宮司)、河野省三(一三期、皇典講究所幹事・國學院大學主事)、小林秀雄(四期、國學院大學・
 立教大学教授)、小森松風、小森甚作(九期、編輯)、清水平一郎(一期、皇典講究所幹事・國學院大學主事)、下田義
 照(國學院大學講師)、関谷真可禰、高次秀直(二四期師国漢、明治書院)、武岡博三(二七期大國文)、田邊勝哉(二期、
 宮内省図書寮)、富岡宣永(水穂会)、二宮勘藏(皇典講究所員)、二宮正彰(二四期師国漢、宮内省)、羽田春埜(清光、
 二期大文、宮内省式部職)、塙忠雄、阪正臣(國學院大學講師)、平野冲天、福井久蔵、本居秀子(本居清造夫人)、
 山内岩雄(五期、今川橋松屋呉服店)、山田忠孝(一期)、山名隆貞(一五期師国漢、皇典講究所幹事心得・國學院大
 學主事心得)、山本信哉(三期、國學院大學教授、史料編纂官補、東京高等師範学校教授)、吉本弘の諸氏が加わった。
 併行して年一回、十一月に開催した「鈴屋翁影前会」はその後、右会員の内、桑原芳樹・武島羽衣・金子元臣・三



「こもり沼」創刊号（國學院大學図書館蔵）

矢重松・宮西惟助・斎藤惇・石川岩吉・山本信哉・井出豊作・植木直一郎・本居五鈴・本居秀子・折口信夫・笠原節二・堀江秀雄・鳥野幸次・福井久蔵・青戸波江・池邊義象・阪正臣・下田義照・塙忠雄の諸氏を中心に催されたが、同会と「白菊会」は大正末年頃には活動を停止した模様である。

二、「こもり沼」社の発足

昭和期に入ると、本郷中学校（私立本郷中学校・高等学校、豊島区駒込四丁目）の国漢教諭（昭和四年四月就任）で、後に母校國學院大學理事長（昭和五十八年四月就任）、國學院高等学校校長に就任（昭和三十四年十月）した小林武治

（三六期高師、昭和三年）が短歌結社「こもり沼」を主宰、昭和十年八月一日付で雑誌「こもり沼」を創刊した。小林はその巻頭で、

こもり沼の真澄の水！ 昼夜滾々として涸れず、而も溢れず。之を掬^{むす}ぶに彌々寒く、無味にして味あり、無色にして色あり、恰も是謙にして驕らず、慮^{こころ}にして懈るを知らぬ吾人の心神をなずらふるに相応しかむ。実に純真なる歌心より迸り出づる詠歎^{なげき}は刹那の口拍子に任せて、はかなき命に終らしむべきにあらず。筆に托し、紙に落さばわが魂は形となりて、躍々生動する

ものぞ。まつぶさ(真具)に現歌壇の実情を洞察するに、天地開闢の混沌に髣髴して、あはれ葦芽あしかびは兆すべくして兆するに由なし。そは偶像の跋扈跳梁して真に玉石を弁へず、天真の歌心を稟受せる若人も、為に進路を阨止せられ空しく奇才を懷いて朽つるに至ればなり。わがこもり沼社こそは、かゝる歌壇の現状が自ら生みし集ひにして、作品本意に立脚して差別を設けざるを本旨とし、低廉なる会費を以て、真に斯道に精進せむ同志の龍門にして、遂には歌壇の葦芽たるべき存在なり。新人よ来れ！わが趣旨に共鳴せむ者は来れ！而して吾人が真摯なる文学運動に興り給へ 昭和十年水無月 創設発行人一同⁽²⁾

と、名文を以て宣言した。会名の「こもり沼」に就いて会員の大久間喜一郎(昭和十二年予科、四八期学国文)は戦後、「こもり沼」の伝統を継承した雑誌「新径」の中で、

…当時から周辺の誰もが記憶に残していた「こもり沼」という謙虚で且つ雅致ある短歌集団の名は、誰もが思い浮かべるあの万葉集の作品から直接採られたものではない。小林武治先生の回想談話によれば、当時年長の同人であられた小口虎雄氏の次の歌に由来するという。

こもり沼のあしの葉むらの夕あかり ひまなくし鳴くよしきりのこゑ 虎雄

万葉集に見える七首の隠沼こもりぬの歌は、殆どが儘ならぬ境遇を歎く歌である。しかし、高市挽歌の一首を除けば、為すすべを失った自失の歌というものではない。大方は恐らく、その主人公の若さ故に、逆境を乗り越えようとする歌である。偶然のことかも知れないし、或は「隠沼」という語に内在した古代的情感に依るものかも知れない。流れ出る水の出口の見えぬ沼、それ故、「隠沼の下ゆ恋ふれば」という表現も生まれる。つきつめれば自制力を持った意欲もほの見える。菟原処女の様に、愛する者の為に我が身を捨て去った健気な魂も、「隠沼」のイメージにつながるものであろうか。⁽³⁾

と記し、小林武治の同期であった小口虎雄(三六期高師、牛島小学校〈墨田区向島〉教諭)が詠じた歌の中から採ったと紹介している。一般に「こもり沼」の文字を見ると「万葉集」から採ったものと思われがちである。「万葉集」での口語訳では「隠り沼」の文字が使われている。この文字から感じられる様に、大久間喜一郎も感想を認めている様に、雑木林の中にひっそりと水を湛えた「沼」は湿地の一つで、比較的小さくて浅い。昔は武蔵野の随所に見られたが、今は宅地化されて、往時の面影が少なくなったのは残念であるが、流れ行く水のはけ口が無く、淀んでいる情景から「万葉集」では気持ちが塞いでいることを表現する際にも使われ、「隠沼」に関して「沼」を含めて十八首ほど見られる。その代表的な歌に柿本人麻呂の「隠り沼の下ゆ恋ふればすべをなみ妹が名告りつ忌むべきものを」(二四四一)がある。小林武治はこれら「万葉集」からでは無く、敢て畏友小口虎雄の歌から命名したのだと言う。小林武治の細やかな心遣いとも言おうか、暖かな感情が漲った命名である。

会の発足に際して社規を次の様に規定した。

- 一、こもり沼社は短歌を熱愛する者を以て同志とし常に作品本位に立ちて精進す。
- 一、会員を分ちて普通会员、維持会員とし、普通会员は会費として月額金三十銭、維持会員は月額六十銭宛を醸出するものとす。但し会員はなるべく三ヶ月分以上前納すること。
- 一、会員には毎月刊行の『こもり沼』を配付す。
- 一、会員は毎月短歌二十首以内及びその他研究評論、消息等を投稿し得。但しその取捨は維持会員に一任のこと。
- 一、会員の原稿は十行二十字詰原稿紙を用ゐ、毎月十日迄に送付すること。
- 一、原稿は半開封とし、封筒に「原稿」と朱記し、郵券二銭を貼付すること。但し他の用件はこれと同封せざることを。

一、普通会员にして力量ある者は維持会員に推薦することを得。

一、維持会員規定は別に之を定む。

一、送稿、送金、その他の用件は、発行所(東京市渋谷区上智町十番地)宛になすこと。⁽⁴⁾

発行所の上智町は小林武治の居住地であった。町名は昭和四十一年の住居表示の変更により渋谷区東三丁目に変わったが、國學院大學や実践女子学園、都立広尾高等学校、区立広尾中学校、区立常磐松小学校、区立広尾小学校など文教地区が乗る台地(通称「若木が丘」)から恵比寿方面(南側)に下る位置にあった。発行所と國學院大學とは至近にあり、江戸中期の儒学者で漢詩人の服部南郭の別邸があったことで知られ、台地からは富岳が眺められた閑静な郊外の文教・住宅地である。

会員は最盛期には二百余名を数えたと言ひ、発足当初、創刊号に稿を寄せた者は、河野通成・紀村岳・吉川泰雄(昭和十一年予科、四八期学国文)・長島夏道・伊木尚茂(昭和十二年予科、四八期学国文)・張堂真仁・小泉祐次(昭和十一年予科、四七期学国文)・庵冷子・廣丘杜夫・船橋亘・小林武治・井出光太郎・瓜生茂・大木達雄(昭和十一年予科、四七期学国文)・萩原芳郎(昭和十一年予科、四七期学国文)・鈴木國郭(昭和十一年予科、四七期学国文)・朝廣武敏・草野浩一郎・外山寛仁・小池直之(昭和十一年予科、四七期学国文)・天野佐久夫の二十一名で、内八名が國學院大學に在学する生徒や学生であったが、年内には小林武治の同期の山田高春(三六期高師)をはじめ、大久間喜一郎・柴原修(四六期高師一)・安村利行(昭和十一年予科)・加地禮太(四八期道哲、六四期政経)・三溝秀雄(昭和十三年予科、四九期学国史)・堀江秀雄・山川弘至(昭和十二年予科、四八期学国文)・吉田謙徳(昭和十一年予科、四九期学国文)・川崎嘉之助(昭和十一年予科、四七期学国文)と言った國學院大學の学生・生徒、卒業生が参加した。

その後、國學院大學関係者では塚田六郎(昭和十六年予科、五二期学国文)、辻彦三郎(昭和十六年予科、五二期学

国文)、山本惇(昭和十七年予科、五三期学国文)、石塚三郎(武内、五二期神道)、市川良輔(昭和十七年予科、五五期学文新)、石塚莊之助(白井、五三期興亜)、大江卓(昭和十八年予科、五五期学史新)、太田浩二(昭和十七年予科、五七期学文)、片山明(昭和十八年予科、五五期学文新)、門林武重(昭和十七年予科、五七期学史)、北島享一(五五期学史新)、中山直四郎(昭和十六年予科、五二期学国文)、吉川篤(五三期興亜)、林陸朗(五四期専門、五七期学史)、鎗田清太郎(五四期専門、五七期学哲)、山本清(五四期専門、五七期学文)、渡邊一彌(五四期専門)、三宅一良(五四期専門)、金城武雄(五三期興亜)、比江島重俊(昭和十八年予科)の諸氏が参加した。

新規会員が増加すると会の事務も次第に煩雑になり、特に会費の徴収の簡素化のために振替口座を設け、また送料の軽減化を図るために第三種郵便物の認可を申請し、許可を得た。編輯子は「わが『こもり沼』もいよいよ第三種郵便物の認可が下りました。日付は、昭和十年十二月二十三日、あたかも皇太子殿下御生誕のよき日に当ります」と喜びを「編集後記」に綴っている。

三、日本民俗学の誕生

草創期に於いて小林武治を補佐したのは、本郷中学校の教え子(七回生)であった吉川泰雄と萩原芳郎であった。二人は本郷中学校の二・四・五年生の際に国語と文法、三年の時に漢文を教わった。吉川泰雄の國學院大學予科志望は小林武治を慕ったもので、上智町的小林武治宅を訪ねた最初がその相談の時であった。吉川泰雄は昭和五十一年一月、佐藤謙三学長の逝去により國學院大學学長代行並びに学長に就任(昭和六十二年三月まで。名誉教授・名誉学長)した。その吉川泰雄と萩原芳郎の二人が会誌「こもり沼」の編輯に携わることになった。吉川泰雄は当時のことを、

小学校(本郷区立富士前尋常小学校、文京区本駒込)をずっと私と級友で、本中では級長で通した萩原芳郎君と一緒に國大の予科に入った。彼は文芸家志望で私は学問志望だった。夏休みに入る頃、先生が主宰で、無宗匠主義の短歌誌「こもり沼」が創刊され何年も月刊を続けた。萩原君が編輯に当り発行所が國大に近い小林先生宅となったので、我々の入浸りが始まった。事務室化した御書斎兼応接間の洋間には、萬葉集総索引・大日本地名辞書・仮名字体沿革資料・日本歌謡集成・狂言集成・国歌大系・短歌文学全集・横光利一全集等々が収められていて、先生のあの博く深い御学殖・教養を物語っていた。：萩原君と私との國大入学を機に、今泉忠義(三一期大國文、國學院大學教授、国語学)・小林武治両先生を中心に「閑吟集」^{かんぎんしゅう}、次いで「醒睡笑」^{せいすいしょう}の輪読会が始まり持続した。「こもり沼」連続の「閑吟集」輪講への誌上御参加が縁で、先生が藤田徳太郎先生と識り合われた。⁽⁶⁾と回想している。

藤田徳太郎は旧制浦和高等学校(埼玉大学)の教授で、日本の歌謡研究の大先達である。

吉川泰雄は更に「こもり沼」には作歌歴のない人々も多く投じたもので、意欲をもったたちまちに目覚ましい成長を見せた。創作に、批評に、研究に活発な活動が展開され「こもり沼」はまさにユニークな存在となった。小林武治主宰は、各自思いの自由な歌風で創作することをのみ指導された⁽⁷⁾と記している様に、「こもり沼」は短歌以外に、回想にある「閑吟集」の鼎談も連載し、⁽⁸⁾また船橋亘の「万葉集」こもり沼「考」、小林武治の「万葉集慢筆」、井出光太郎の「民謡三題」、岩木檣次の「伊勢物語論講」なみだ川⁽⁹⁾などの論考を数多く紹介したが、中でも目に引くのが、一周年記念号(昭和十一年八月、第二巻第八号)に掲載した柳田國男の「ウソと文学との関係」である。これは昭和七年、設楽民俗研究会の雑誌「設楽」(昭和六年七月創刊、昭和十五年十二月、十七号で廃刊)に発表しものの転載である。⁽⁹⁾柳田國男と小林武治との友情によるものである。

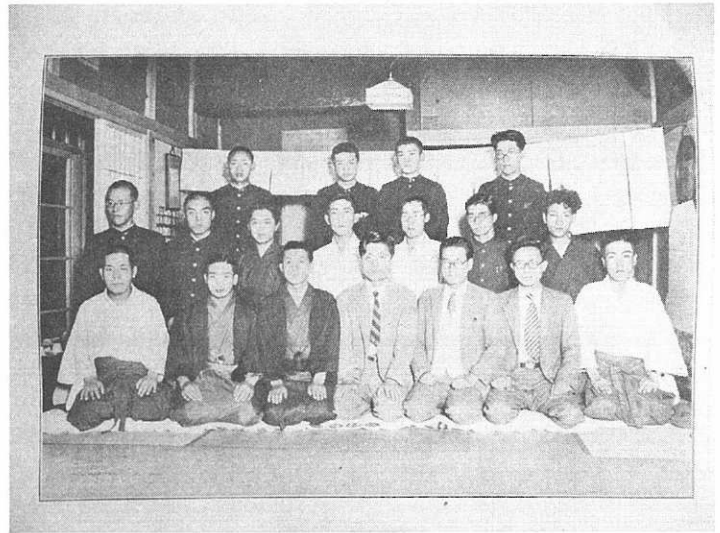
小林武治は柳田國男が発表するものに早くから注目していた。「こもり沼」創刊号の発刊に向けて編輯に勤しんでいた昭和十年に柳田國男編『日本民俗学研究』（岩波書店刊）が出版され、その紹介を「こもり沼」第二巻第一号（昭和十一年一月）の「消息」欄に「『日本民俗学の誕生』 柳田國男先生編『日本民俗学研究』を読む」を書いた。

昭和十年七月三十一日は恰も柳田國男先生が還暦の生誕日に当られるので、此の機会に日本民俗学講習会が外苑の青年会館で開かれた。私も幸に聴講を許され有頂天の喜悦を淇へてゐた矢先、生憎演習召集の為八月二日より三週間軍服を纏はねばならなくなつた。残念とも何とも言ひ知れぬ心持を潜めて、せめても三十一日と八月一日の両日出席した。そして二日以後の聴講をば萩原君に託したのである。

文化科学としての日本民俗学は茲に誕生したのである。先生の矍鑠たる御元氣には全く「これからだ」の印象をうけた。将来日本民俗学史といった著述も必ず出る事と思ふが、此の会こそは特筆大書さるべき催しと信ずる。民俗学（フォークローア）が学的価値を有するか否かの目処もつかず。世の識者さへ白眼視して居た頃から強い信念の下に、孜々研鑽に精進を重ねられた先生の苦闘も酬いられる時節が到来した訳だ。

嚮に民間伝承論を公にされて民俗学徒（フォークロリスト）の態度に就いて調べられて居るが、結論を控へ実地の採集に邁進すべき事を主張される。「日本民俗学研究」は此の大会に於ける先生を初め、十三氏の講演を主に更に同会の座談会記録を加へられた四六判六百頁に垂んとする冊子で、凡て謙虚な研究態度に敬服した。されば一度之を批繙すれば直に我が生命に道交して、学的興奮と生命の歡喜に充たされるのである。真に日本民族の全生活は斯学によつてのみ感得する事が出来るのであつて、刻々に衰滅變遷の途にあるわが民俗の採集こそは国家がなすべき睫眉の問題である。

近時日本精神とか国体明徴とか鐘太鼓の触れこみは大したものだが、「力無いかへる骨無いみゝず」の誹謗を免



こもり沼一周年記念歌会(中里数忠において)

前列右から＝長島夏造・田中秀太郎・廣丘杜夫・小林武治・
長野孝延・川崎将・萩原芳郎 中列右から＝大杉欣朗・藤
野斌・伊木尚茂・小池直之・小泉祐次・川島正・井出光太
郎 後列右から＝川崎嘉之助・吉川泰雄・山川弘至・三溝
秀雄

れる事は出来ぬ。混々たる我が民族生命の源泉を究明し社会機
構も経済組織も真に皇国体に合致さすべき熱意の士は先づ本書
を一体されん事を。
と綴っているのである。

小林武治は応召のため講習会の全日程参加は不可能になったが、
この講習会は折口信夫や金田一京助らが柳田國男の還暦を祝うた
めの会を計画したところ、柳田國男がこれを固辞したため、改め
て『遠野物語』増補版の出版と還暦の二つの祝いを合せて講習会
を開くことにし、折口信夫や金田一京助が世話役になった。文中
「十三氏の講演」の中には折口信夫も金田一京助も講じている。¹⁰⁾

卒業生も多数参加し、元鶴岡八幡宮宮司の白井永二(四六期学国文)もその一人であった。白井永二は、

私は院友会で一番記録しておいてもらいたいのは、柳田國男先生の民俗学の基礎が院友会館で出来たと言うこと
です。学部的一年生だった昭和十年七月三十一日から八月六日までの第一回日本民俗学講習会が日本青年館で、先
生の還暦をお祝いして開かれ、これに出席しました。八月四日の先生の講演「採集期と採集技能」、内容は岩波書
店から『日本民俗学研究』として出版されています。

第二回講習会は翌年八月三日から七日までの五日間、院友会館において開かれ、先生が「伝承と伝統」カゼとク
サ」の二つの講演をされました。それは「民俗座談」と言う題名で、小さな本になりましたが、その本のことは『柳

田國男集』の年譜(別巻第五)からは抜け落ちています。

院友会館の、今言う大講堂の中を四角く囲って、誰もの視界に柳田先生が座っておられたと思います。これが縁で、恐らく折口信夫先生のお力と思うのですが、院友会館で民俗学の資料集めの会が開かれるようになりました。ですから、私は「院友会館は大きな仕事をしたもんだ」と未だに思っています。

沖縄の元図書館長の伊波普猷さんにも沖縄の民俗の紹介をしていただきました。柳田・折口両先生は伊波さんを大いに応援されていました。伊波さんは琉球を紹介する仕事をずっと続けておられました。^①と語っている。

柳田國男と小林武治が何時出会ったかは定かではないが、折口信夫や金田一京助を通じて懇意にしていって、小林武治が会誌「こもり沼」を創刊するのを祝って転載を許可してくれたのであろう。

「こもり沼」一周年記念号には今泉忠義(國學院大學教授、三二期大國文)が「短歌の用語」を寄稿、堀江秀雄が短歌「白薔薇の散る」五首、上田駿一郎(女子学習院教授)が短歌「明治神宮参拝」五首をはじめ、多くの会員が短歌や随筆を寄せているなど一周年記念号に相応しい充実した内容に、編集を担当した萩原芳郎は「たゞ厩大なばかりでない記念号が出来上ったことに感極る」と「編輯余滴」の中で感激している。

会誌の文字は会員の河野通成が揮毫し、表紙の写真は小林武治が所蔵していた山崎朝雲・朝倉文夫門下の彫刻家上田直次の面を用い、巻頭には古泉千樫の歌四首(沼畔雑歌)を掲げた。第二号には木下利玄の歌五首(曼珠沙華の歌)、第三号には若山牧水の歌四首(かななづき)、第四号には島木赤彦の歌四首(山房内外)、第五号には与謝野寛の歌四首(無題)を順次掲げている。

また東洋大学や農業大学(東京農業大学)及び國學院大學にそれぞれ支部を設け、その近況を「支部雑報」(第三巻第

十二号)として紹介した。例えば東洋支社の『鶏声台から』には、「長島夏造と大杉欣朗は所長暉峻博士の指導により日本労働科学研究所で社会問題を研究している。昭和十二年夏、神風声援歌を作った先輩(哲学館Ⅱ東洋大学)河西新太郎氏(四国民報Ⅱ四国新聞)や正富汪洋氏(詩人)、萩原朔太郎氏(詩人)らと共に詩集を出した。萩野巨舟(萩野猛)は教育研究雑誌を編集している。石井光太郎は大学の編輯者。大杉欽朗は剣道三段の猛者で雑文家…」と言った具合である。農業大学の通信名は学校に相応しい「黒土の通信」、國學院大學は町名から「若木町便」とし、会員の近況をそれぞれ伝えている。編輯所からは「上智より」としている。

この様に多くの会員に支えられた「こもり沼」であったが、時代は次第に戦雲急を告げるに至って、戦地に赴く会員もあり、また物資も欠乏する様になって会誌の発行が難しくなってきた。止むを得ず昭和十五年一月号と二月号(第六卷第一・二号、通巻五四・五五号)、三月号と四月号(第三・四号、五六・五七号)、五月号・六月号(第五・六号、五八・五九号)、十一月号・十二月号(第十一・十二号、六四・六五号)、昭和十六年三月号と四月号(第七卷第三・四号、六八・六九号)、五月号と六月号(第五・六号、七〇・七一号)、昭和十七年八月号と九月号(第八卷第八・九号、八五・八六号)、昭和十八年五月号と六月号(第九卷第五・六号、九四・九五号)を合併号としなければならなかった。

この様な合併号を出さなければならぬ現状に編輯担当の山本惇は昭和十八年五月・六月合併号の「編輯後記」で「前号で予告した通り、五・六月合併号をお届けする。合併号といふから幾分の増頁を期待された方があらうかとも思ふが、種々の事情からこの通りの頁数となった。時節柄今後も十六頁の予定で、その代り毎月発行してゆくつもりである。十六頁無駄なく使つたら五十頁六十頁ぐらいの価値を生み出すことも無理でもあるまい…」と旺盛な発行意欲を示したが、戦争は次第に激しくなり、國學院大學が所在する渋谷・青山一帯の地も昭和二十年五月二十五日夜半の大空襲で焦土と化した。國學院大學は幸いにも罹災の厄を免れたものの、上智町的小林武治邸は貴重な書籍類と共に

焼失した。また用紙も欠乏するに及び通巻九十五号を以って已む無く廃刊せざるを得なかった。小林武治は昭和十九年七月、北支方面に再度の応召中であり、復員は昭和二十年八月であった。だが門下の吉川泰雄は昭和十七年九月に応召して未だ還らず、戦後、若い多感の四年間をシベリヤに抑留、昭和二十四年十二月、七年ぶりに祖国の土を踏んだのだった。

四、復刊「新径」の発刊

「こもり沼」が「新径」と名を変えて復刊したのは四十三年後の昭和六十二年三月のことであった。「こもり沼」を主宰した小林武治が健在であることから、急遽復刊の気運が高まり、旧同人二十四名が発起委員となって復刊再出版の構想を練り、先ず機関誌名を「こもり沼」の復刊として「新径」とした。同時に「新径」の背景ともなる学問的な基盤として「隠沼学会」を設けることになった。これは「従来の単独的な国文学の領域にとどまらず、歴史学・民俗学・哲学及び外国文学等の研究を含め、広い視野に立った新しい二十一世紀の学問体系を目ざした総合的な学術団体にする」ことを目指すためであった。¹² その際、発起委員は「まちがっても専門という名における狭隘な象牙の塔的な領域にとじこめることのないようにしたい」とし、その目的達成のために、機関誌の発行、各種の講演会、講座等の開催行事をも積極的に推進することにし、会長には小林武治を全委員一致で推挙した。そして、

今日、短歌は歌壇の盛況とはかかわりなく、歌壇的な特殊人口のなかで、衰弱の一途を辿っている。伝統的なこの文芸遺産が果して、次の世代に継承されるか否かは極めて微妙である。短歌が本当に次の世代に継承されるためには、いまの短歌創作の文学的基盤では困難であろう。あながち、古典の威を借りるということでも無理であろう



「新経」創刊号〔國學院高等学校蔵〕

し、といって新しい世代の思潮におもねるというのでは、継承は一層おぼつかない。ジャーナリズムや読者だけが批評の担い手ではない。そのためには短歌はもっと厳しい文学批評を受けなければならないものと思われる。釈迢空(折口信夫)は今日を予言することく、批評の衰退を短歌滅亡の原因の一つにあげている。短歌が、小説や詩とおのずから別個の芸術圏を持つことは当然だが、いまの短歌圏は独立しているのではなく、あきらかに孤立している。中高年のサロンの孤芸であってはならない。伝統芸能としての職人的な鍛錬道はもとより重要であるが、同時に更に土壌としての豊饒な文学的基盤が必要である。発想の貧困なるものには、いかなる表現も期し得ない。「新経」は「こもり沼」の精神を継承し、歌壇内外の広い英知を求めるとともに、特に若い人々の鋭意を結集し、次の世代に向かつての自由で斬新な羽ばたきを

期待したい。

と会の趣意を公表したのであった。¹³⁾これは森安理文が起草し、吉川泰雄・大久間喜一郎・塚田六郎が推敲したものであった。

「新経」題字は小林武治が揮毫し、表紙画は日展画家の松井亨(六五期政経)が描き、昭和六十二年三月を以って創刊号を発行した。

巻頭には小林武治の「虚相」と題した歌「眼つぶれば無限の時空。その上にわが身はあれど、すべなかりけり」など一〇首を配し、以下、小泉祐次「京絵図」六首、岡しづか「郡上秋翳」七首、大久間喜一郎「儀礼歌・その他」

一九首、鈴木貞次「身辺雑感」一〇首、小池直之「折にふれて」二〇首、坪井節子「思い出の姑・晩秋」一四首、塚田六郎「花散れる日に」八首、おほくま春海子「歌」一五首、鈴木國郭「氷原の音」二〇首、萩原美樹雄「妻の死・追慕」一五首、小峯泰江「空華」二〇首、抄滋郎「時はながれ」二二首、高野良知「秋」二〇首、高橋恵子「冬の色」二〇首、伊藤孝子「魚群」一五首。序で大久間喜一郎「短詩形文芸の二つの顔」、内野仁之助「遊・山・西」、森安理文「晩秋の色」の各一文を挿み、更に中村幸弘(六四期文)「昭和六十一年秋」五首、有山大五「冬の宿」二〇首、森安理文「コスモスの咲く風景」二〇首、樺邦「冬・蚊の声」一〇首、土屋慶子「絵の中の女」一〇首、佐野和子「父のことども」一七首、小口喜代子「家居」一〇首、富田米子「過去へ未来へ」、小野憲男「さかしま」五首、小口虎雄「くさぐさの歌」二〇首、後藤豊治「秋色」一一首、吉川泰雄「琥珀のごとく」四首、安藤静江「幻影(ミラージュ)」一〇首、湯浅吟子「冬のメロン」一〇首、佐藤郁子「旅行雑詠(四国・新潟)」一〇首、榊松「臥牀徒然」五首。また小池直之「樺太随想」、秋末一郎(昭和十四年予科、五〇期学国文)「似雲の見た宗祇自画自讃の遺像」、堀江真喜夫「雛市」の随想を載せた。

この出版に先立ち、前年の昭和六十一年六月十四日、「こもり沼」廃刊から四十三年ぶりに港区白金台の八芳園で元会員が旧交を温め合った。参加者は小林武治を中心に、信州から小口虎雄・喜代子夫妻、熊本から内野仁之助、奈良から大宮謙徳、伊勢から小泉祐次、静岡から森下龍雄、東京とその近郊から秋末一郎、小池直之、小峯泰江、鈴木國郭、塚田六郎、辻彦三郎、升本順子、森安理文、吉川泰雄、大久間喜一郎・澄子夫妻の十八名であった。「こもり沼」の紙面を飾った磯上やち・井手光太郎・稲葉博・川崎嘉之助・河野斌・紀村巖・田丸鈴子・萩原芳郎・三島徹・山川弘至は既に鬼籍に入り、会に先立ち冥福を祈った。

そこから「約五時間の宴はまたたく間に過ぎたが、各々の胸中には、この隠沼学会をして次の世代に送る大いなる

遺産にしたいという深い決意がよみとれ」と言う。この頃、「隠沼学会」の新委員に中村幸弘・有山大五・小山奈々子・森磐根（六七期文、六八期専攻科）・高野良知・小野憲男の六名が加わった。¹⁴

この様にして始まった「隠沼学会」ではあったが、「新径」創刊号を発行して程なくの四月十二日、会長小林武治が八十一年を一期としてその生涯を閉じた。このため「新径」第二号を急遽「追悼・小林武治先生」として発行した。その内容は、吉川泰雄「喪師篇」一〇首、荻原美樹雄「小林先生を悼む」六首、小池直之「孤愁」五首、小峯泰江「朱文字」新径一〇首、おほくま春海子「泪」七首、岡しづか「嘆きうた」三首、森磐根「花鎮め」八首。序で塚田六郎「幽冥の師のみたま偲びて捧ぐる辞」、鈴木國郭「閑吟集研究の頃」、小峯泰江「春怨・小林先生」、後藤豊治「小林さんと私」、大久間喜一郎「小林武治先生の見据えたもの」、小泉祐次「渋谷上智町―小林先生のみ霊に―」、小池直之「先生の一首」、内野仁之助「私学を愛する人」、秋末一郎「國學院高校生みの親 小林武治先生の長歌並びに反歌」、小山奈々子「小林先生と高校と」の随筆、「小林武治先生仮年譜」に続き、森安理文「遠き感触」一〇首、塚田六郎「潮風の丘」十一首、おほくま春海子「蒹葭草」二〇首、有山大五「白き花」一七首、小野憲男「やすらひ祭り」一〇首、樺邦「風通過る」六首、後藤豊治「北国の回想」一四首、高野良知「春」一五首、中村幸弘「声五首」七首、村橋英司「臥竜」五首、湯淺玲子「鳥は絵のなか」一〇首。この後、塚田六郎の「短詩構造と虚構の効果」の小論を紹介し、引続き小池直之「春琴抄ほか（春琴抄・琉球回顧・独詠抄・五島美術館及び庭園にて）」一五首、大久間喜一郎「曼珠沙華と墓と」二〇首、鈴木國郭「春、時間が留守になるやうな」二〇首、安藤静江「花」一〇首、小幡容子「季節めぐりて」八首、柴田有紀子「日常断片」六首、高橋恵子「遠つ海」二〇首、坪井節子「〇」九首、長谷川貴子「浜風」八首、山崎ちとせ「花鳥風月」一〇首、吉田憲恵「日々」七首、室井義映「雑詠」六首を掲載した。

鈴木國郭の「閑吟集研究の頃」の追悼の一文には、

わたくしにとって先生は、歌人というよりも学者としての印象が深い。今泉忠義・藤田徳太郎先生をお迎えして「閑吟集研究」を継続されたこと。そして、それを「こもり沼」誌上に整理されて合同研究のかたちで発表なされた。中世文学の研究が漸く活発となり、閑吟集や中世の歌謡に対する関心が高まりつつあった頃である。わたしたちは、文庫本の閑吟集を展いて書き込みをし乍ら拝聴した。永正十五年（一五一八）に編纂された閑吟集の真名序・仮名序からはじまり、先行の、万葉・伊勢・源氏・山家集・保元物語・平家物語・十訓抄・玉葉・詞花その他中国文学・漢詩にまで幅広い深い考証が行われた。中世語法の研究や植物学・動物学にまで入っていった。この研究会の熱気が、わたくしたちに研究者の態度を教えてくれた。

とあり、小林武治が後進を育てるために、自身の研究課題の一つである「閑吟集」を用いた意味がここに氷解する。

「新径」編輯子は第二号「後記」に、

「こもり沼」には作歌歴のない人々も多く投じたもので、意欲をもってたちまちに目覚ましい成長を見せた。創作に、批評に、研究に活発な活動が展開され「こもり沼」はまさにユニークな存在となった。小林武治主宰は、各自思い／＼の自由な歌風で創作することをのみ指導された。「赤い鳥」の鈴木三重吉がその「綴方読本」で、その指導に触れて、「教育参考」ということを説いている。あれは、次の流れが生活綴方に向けられるまえの、文芸的綴方なのだった。作歌も、人と為ることに培う。もちろん一芸術として人生を豊かにする。そして心が托せて、おのずから日記のようになつてゆく。良い短歌人口をふやしたい。多感な若人たちを、「新径」に一人でも多く呼び入れたい。いや若人たらずとも、作歌の道はもと／＼生涯教育に適っていた。短歌が、少なくともそれなりの多様性、可変性を蔵していることは分かっている。それでもと言うか、だからと言うか、短歌の生命を保障してゆきたい。いよよ新鮮にあらしめたい。

と記し、「戦前の『こもり沼』時代と現代との、短歌社会の状況の相違はどうであれ、『新径』は短歌というものの継承の途を探究する。『新径』は、短歌継承者の生れ継ぐように、『こもり沼』の精神で創刊されている。新人に大いに呼びかけたい」と括っている。この様に主宰小林武治が目指した短歌を通じての人間形成の精神は「新径」の中に脈打ち、後進に受け継がれているのである。

おわりに

國學院大學の百三十年の歴史を有する和歌教育は年々裾野を広げ、将に富岳の如く秀麗に聳え立っている。東宮傳育官当時の石川岩吉(戦後の理事長・学長)は「校史の断面」と言う稿を「國學院大學新聞」⁽⁵⁾に寄せ、「歌を詠む大学」の項で、

母校の性格にふさはしい一つの思ひ出がある。それはある年の卒業式の時、元の文部大臣久保田譲さん(当時既に大臣を辞職して野にあつた)が来賓として来られたことがある。その久保田さんが「國學院といふ学校は極めて世間と変つて特色のある処があると聞いてゐた。それは正課の内に歌を詠ませることがある。日本の国は毎年畏き辺では歌会始めに国民から詠進と御許しになったりする国柄であるが、学科として歌を詠ませる学校が他にないのに國學院にそれがあるのは良い事である。それで私は是非来たいと思つてやつて来た」と言はれたが、以前文部大臣をやり、後に枢密顧問官までやられた程の名士がかく言はれたことは非常に意義深いこと、思つた。

と綴っている。記して六十有余年を経た今日、久保田譲が感慨に耽つたであろう思いは、今の國學院大學の園からも窺い知ることが出来るのである。

註

- (1) 「國學院雜誌」第二十五卷第一号、四十八頁～五十一頁。
 - (2) (4) 「こもり沼」第一卷第一号、昭和十年八月一日刊。
 - (3) 「新徑」創刊号所収、昭和六十二年三月刊。
 - (5) (6) 國學院高等学校「小林武治先生追悼論叢」(昭和六二年度)所収、吉川泰雄「恩師 小林武治先生」引用。
 - (7) 「新徑」第二号後記引用。昭和六十二年。
 - (8) 「閑吟集」は小林武治・藤田徳太郎・松木樗次の三氏による鼎談で昭和十一年三月から昭和十二年四月まで十四回連載した。庶民の間に流行した笑い話を纏めた「惺睡笑」(江戸初期、著者は京の僧侶安楽庵策伝。八巻、一〇三九話収録)とともに二書の輪読会も行っていた。
- 因みに國學院高等学校には、藤田徳太郎と小林武治の蒐集した歌謡関係書籍(一〇九八点、「日本近世歌謡資料集」)が「藤田・小林文庫」として収蔵されている。藤田徳太郎は『古代歌謡乃研究』『王朝文学の歴史と精神』『近代歌謡の研究』等の著書で代表されるこの道の第一人者であった。その研究のために歌謡関係書の写本や版本等を精力的に蒐集した。だが終戦の年、山口県下関に滞在中、空襲の厄に遭い亡くなられたと漏れ聞く。その蒐集した資料は終戦直後に神田の古書店に渡ったことを知った小林武治は、散逸するのを防ぎ、学術研究に役立てると言う条件を付けて譲り受け、昭和三十五年十月、小林武治自身が戦後蒐集した資料一切と共に國學院高等学校に寄贈した。宗教歌謡、琴曲、尺八、舟歌、長唄・浄瑠璃、小唄、端唄、地方唄、稽古本と言った歌謡・芸能研究はもとより、歌謡を通じて日本文化を解明する上で貴重な蔵書群となっている。国文学研究資料館は昭和五十二年に、その一部

二八〇点をマイクロ化。更に雄松堂フィルム出版は全資料をマイクロ化した。平成二年、岩波書店は全書目を『古典籍総合目録』に収載した。

(9)『定本柳田國男集』第七卷二六一頁に所収。そこに「設楽」昭和七年より転載、「索引」に「こもり沼」二一八とある。

(10)折口博士記念古代研究所編『折口信夫手帖』の昭和十年(一九三五)七月三十一日の項、参照。他の題目と講演者とは以下の通りであった。「海上労働の話」桜田勝徳、「フランスにおける民俗学研究」松本信広、「交易の話」最上孝敬、「協同労働の慣行」橋浦泰雄、「方言研究と郷土人」後藤興善、「独塊」(ドイツ・オーストリア)両国における民俗学的研究」岡正雄、「昔話の採集」関敬吾、「民俗学と人文地理学との境」佐々木彦一郎、「冠婚葬祭の話」大間知篤三、「琉球諸島採訪談」伊波普猷、「民間信仰の話」杉浦健一、「アイヌ部落採訪談」金田一京助。この時、柳田國男は「採集期と採集技能」を講じている。この講習会は当初、「民間伝承の会」として始まり、昭和二十四年に「日本民俗学会」と改称した。

(11)筆者は『國學院大學院友会百二十年史』(平成二十二年十一月三日刊)を執筆・編纂するに際し、平成十九年二月二十二日、聞き取り調査のため鎌倉市雪ノ下の寓居に白井永二氏を、院友会の宇井克彦常務理事、吉村透主任と共に訪問した。聞き取りの一部を『國學院大學院友会百二十年史』の別刷りに「民俗学と院友会館の功績」と題して収録した。氏は平成二十年一月一日、九十三歳で亡くなられた。

(12)(13)「新径」創刊号「後記」五七頁。

(14)「新径」創刊号三〇頁「再会」参照。

(15)「國學院大學新聞」第一三八号、昭和十八年一月二十日付。久保田讓(弘化四年「二八四七」)昭和十一年

〔一九三六〕Ⅱ文部官僚、第一次桂太郎内閣の文部大臣(明治三十六年～三十八年)、枢密顧問官、臨時教育会議副総裁、臨時教育委員会会長、議定官などを歴任した。

(補記)「こもり沼」及び「新径」調査に際し、國學院高等学校校長津田栄、同校元事務長尾高敬三、同校元教諭小山奈々子の三氏のご高配に与った。紙上を借りて深謝申し上げる。

「こもり沼」誌は現在、殆ど残存しない。小山奈々子氏等國學院高等学校関係者は小林武治校長の業績を後世に伝えるため、大久間喜一郎氏が所蔵するものを借用、複写し、製本して同校に保存した。併し第八卷第一号(昭和十七年一月号、通卷七八号)は残念ながら欠けている。國學院大學図書館には第一卷第一号～第五号(昭和十年八月～十二月、通卷第一号～第五号)、第二卷第一号～十二号(昭和十一年一月～十二月、六号～一七号)、第六卷第一号～十二号(昭和十五年一月～十二月、五四号～六五号)、第七卷第一号～十二号(昭和十六年一月～十二月、六六号～七七号)のみ所蔵している(たまプラーザキャンパス図書館)。